総　合　研　究

性格表現用語に関する基礎的研究

——クリニカル・サイコロジストと一般成人との比較検討*——

山田良一　佐藤勝利
水山進吾**　荻野　惺***

I 問　題

われわれは先に，心理学における基礎的な方法としての質問紙法に関してその方法論的吟味をするべく，心理学的臨床の分野に限定して性格調査・検査に用いられる語彙の問題に焦点づけて検討をすすめた（註1）。つまり，そこでは，質問紙法において語彙理解のあり方がもっとも基本的な問題であって，それが性格調査・検査の問題領域において集約的に示されると考えたからである。

一般に心理学的臨床の分野においては，クリニカル・サイコロジストの主要な業務として，対象者を理解するための性格像の把握・記述等，性格像表現のあり方が問題となる。しかし，そのために利用可能な，信頼性の高い性格検査が存在するとしても，それが具体的な被検査者に与えられ，個人個人の性格理解が目指されたときには，解釈の妥当性との関連において，次のような二つの問題が生ずると考えられる。

一つは，個々の被検査者自身が，与えられた検査に用いられている語彙をどのように理解したかという問題であり，二つには，得られた被検査者の反応を通してその個人の性格像を描きあげる時に生ずる，検査・解釈者側の語彙理解の問題である。この後者の問題は，つまり，解釈者が被検査者の反応をどのような意味のものとして理解し，それにもとづいて共通性の高い妥当性のある性格像を描き出すことができるかにかかわるものであるといえよう。この場合，まず，性格調査・検査で用いられる語彙について，解釈者相互間に共通した理解が存在しているかどうかが基本的に問われなければならない。

われわれの先の研究は，この第二の問題に接近する試みであった。その研究の主なねらいは，心理学的臨床の分野においては実際にどのような性格表現用語がどのような意味で用いられているか，クリニカル・サイコロジスト相互の間に性格表現用語自体について，あるいは，その意味構造についていかなる共通性がみられるか，共通性の高い語彙はどのようなものであり，共通性の低いものはどのようなものであるか，また，具体的・記述的な性格表現用語と特性的なものとの関連はどのようであるかといった諸問題を検討することにあった。これらを明らかにするために，全国のクリニカル・サイコロジストを対象に調査研究を行なったのである。その結果，いくつかの知見を得ることができたが，この段階での性格表現用語の共通性の問題は，単に，性格検査・調査を通しての性格理解の問題にとどまらず，性格理解の問題を中心とするクリニカル・サイコロジスト相互の間のコミュニケーションにもかかわる問題でもあり，さらに，彼等と他の一般成人との間のコミュニケーションにもかかわってくる問題であるといえる。

つまり，臨床場面やその他において，性格検査・調査によって得られた知識・情報を，治療効果を一層高めるために，クリニカル・サイコロジストが臨床専門家ではない他者に伝達し，意見を交換し，指導する必要が生ずる。その場合に，主に使用される性格表現用語に関して，両者間で基本的な意味理解に共通性が欠如しているならば，それは，治療効果を阻害する一つの条件となるであろう。それ故，実際のコミュニケーション過程においては，そのような条件をできるだけ軽減する努力をはらい，両者間のコミュニケーションが充分にスムースに行なわれることが必要である。

この両者間のコミュニケーションの可能性を検討するためには，まず，基本的な性格表現用語に関して，両者間での意味理解の共通性の問題，裏返していえば，意味

---

* 本研究は文部省科学研究費による「質問紙法に関する基礎的研究」（代表者　近藤貞次）の一部をなすものである。
** 名古屋市立保育短期大学
*** 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程
註1　続有恒他「質問紙法に関する基礎的研究—心理学的臨床の分野における性格用語の検討—」名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科— 第13巻　P.59～74，1966

連関に関する両者間での差違の実際を明らかにし，さらに，その理解の差違に関与している規定条件を検討することが必要であろう。

本研究は，このような問題に接近しようとするものであるが，その第一歩として，日常の心理学的臨床の分野においてクリニカル・サイコロジストが性格像把握のために使用している性格表現用語をとりあげて，それらの用語の意味理解に関して一般成人間においてどれほどの共通性がみられるか，どのような意味連関でもって理解されているかの実際を，クリニカル・サイコロジストの場合と比較し，また，意味理解を規定している条件を探索することによって，両者間でのコミュニケーションの可能性を吟味しようとするものである。

II 方　法

1 調査語彙及び分類カテゴリー

本研究の調査でとりあげた，性格表現用語100語と分類カテゴリーとして使用した10語の特性的用語は，われわれの先の研究で用いたものと同じものである。それらの語彙の収集及び選定の具体的手続の詳細は前回の報告にゆずるが，それらは，全国の心理学的臨床の分野で活動しているクリニカル・サイコロジストの事例報告の具体的記述の中から，性格像を表現していると思われる語彙のすべてをとり出して整理をしたものである。

2 調査票の作成—分類及び評定法の手続—

性格表現用語としての100語の語彙一つ一つについて，10の分類カテゴリーのいずれともっとも関係が深いかという観点で分類するよう対象者に求めたが，その具体的手続は先の研究とは少し異なっている。先の研究では，100語の一つ一つを印刷したカード100枚を郵送し，カード分類により資料を得たが，今回は，附表1のような調査票を作成して一斉調査によりすすめた。

また，この分類作業のほかに，それらの語彙が対象者にとってどのような性質のものとうけとられているかを知るために，5段階尺度の評定を求めたが，それらの評定は，それぞれの語彙が，「内面的・解釈的」なレベルを表現するものかあるいは「行動的・記述的」なレベルを表現するものか（表現水準），また，その語彙が「ふだんよく使われていることばか」あるいは「あまり使われていないことばか」（使用度），さらに，「ことばとして，その意味が明瞭であるかどうか」(明瞭度)に関するものである。

3 調査対象者

語彙の分類及び評定を求めた調査対象者は，名古屋大学教育学部において行われた昭和42年度「社会主事講習会」受講者で，94名である。その対象者の年令，現職，勤務地，最終学歴は，Table 1 の通りである。

Table 1　調査対象者の諸特徴

年令	人数
20 ～ 24	6
25 ～ 29	14
30 ～ 34	9
35 ～ 39	17
40 ～ 44	24
45 ～ 49	17
50 ～ 54	3
55 ～ 59	2
60 ～ 64	2
計	94

現職	人数
教育委員会・事務所	58
公民館	4
小学校教員*	12
中学校教員**	13
その他	4
不明（公務員）	3
計	94

* 教頭・校長も含む
** 教頭も含む

勤務地	人数
愛知県	44
岐阜〃	22
三重〃	15
福井〃	9
富山〃	3
不明	1
計	94

最終学歴	人数
高等小学校	2
旧制中学・新制高校	16
師範学校	47
旧制専門学校	9
新・旧大学	18
不明	2
計	94

これによると，対象者の年令は平均45.4才で，多くの者は地方の教育委員会及び教育事務所で仕事をしており(61.7%)，最終学歴は約半数が旧制の師範学校出身で，半数近くが現在愛知県内に勤務している。彼等はもちろん一般成人を代表する者ではないけれども，受講後は社会主事としてそれぞれの地域で活動する立場にあり，その仕事の性質上，人と接し，人を理解する必要に直面すると考えられる人々であり，そういう点で，性格表現用語に関する彼等の意味理解を検討する意義が認められよう。

4 調査年月

1967年7月

Ⅲ　結果と考察

1　語彙の分類と共通性

本研究においても，100語の語彙それぞれについて10の分類カテゴリーのうちいずれともっとも関係が深いか（主分類）の判定を一般成人（以下N.G.と略称）に求めたのであるが，その判定の一致率に基づいて，それらの語彙を第Ⅰから第Ⅳまでの4群にまとめ整理した。その群別のための基準は，前回のクリニカル・サイコロジスト（以下C.P.と略称）の場合と同一であるが，この一致率は，語彙の意味限定の度合，意味の共通性の段階を表わすものと考えられた。

N.G.に関する結果はTable 2～5に，また，N.G.とC.P.との群別語数の比較はTable 6に示される。

Table 2　語　彙　分　類　一　覧

群別	語彙	1 依存性	2 情緒不安定	3 自己中心性	4 協調性	5 神経質	6 自閉性	7 劣等感	8 自己顕示性	9 衝動性	10 意欲性	X その他	Y 無答	表現水準 平均	表現水準 SD	使用度 平均	使用度 SD	明瞭度 平均	明瞭度 SD
第Ⅰ群	27 甘えがちな	88	2	3	1	0	1	0	1	0	2	0	1	2.76	1.04	4.08	0.79	4.32	0.64
	58 そわそわしている	0	82	3	0	11	0	1	1	1	0	1	0	3.20	1.15	4.01	0.70	3.76	1.03
	86 自己本位の	0	4	90	0	0	0	1	1	0	1	1	1	2.97	1.08	3.83	0.79	3.83	0.87
	2 わがままな	2	3	81	2	0	4	1	4	0	0	2	0	3.21	0.99	4.46	0.77	4.18	0.94
	93 人付き合いのよい	1	0	3	83	0	0	0	4	0	3	4	1	3.57	0.94	4.03	0.86	3.99	0.84
	61 神経過敏な	0	4	0	0	92	0	1	1	2	0	0	0	2.35	1.09	4.01	0.77	3.77	0.96
	94 チョットしたことが気になりやすい	1	5	0	0	85	3	3	0	0	0	2	0	2.53	1.13	3.96	0.70	3.85	0.98
	8 物事を苦にしがちな	0	1	1	0	83	7	4	1	1	0	1	0	2.27	1.00	3.69	0.93	3.60	1.10
	32 見栄をはった	0	0	4	0	0	2	3	83	0	3	2	2	3.37	1.13	4.03	0.62	3.84	0.93
	38 きどった	0	0	9	0	1	1	2	81	3	0	3	0	3.35	1.09	3.77	0.84	3.49	1.08
	14 一生けんめいな	0	0	1	5	0	0	1	2	1	88	1	0	3.66	1.27	4.65	0.56	3.67	1.01
	35 向上心の強い	2	0	1	0	0	0	1	3	1	87	4	0	3.01	1.27	3.96	0.87	3.88	0.93

註1）意味共通性の度合による群分類の基準

Ⅰ　群……1カテゴリーが81%以上

Ⅱ　群……1カテゴリーが61%～80%，他がそれぞれ20%以下

Ⅱ′……1カテゴリーが61%～80%，他の1カテゴリーが21%以上

Ⅲ　群……1カテゴリーが41%～60%，他がそれぞれ20%以下

Ⅲ′……1カテゴリーが41%～60%，他の1カテゴリーが21%以上

Ⅲ″……いずれも40%以下で，2カテゴリーを合わせると61%以上

Ⅳ　群……上記いずれにも該当せず，共通性の乏しいもの

註2

50　……41%以上で，当該語彙が主として属するカテゴリーを示す

<u>30</u>　……21%以上で，当該語彙が副次的に属するカテゴリーを示す

Table 3　　語　彙　分　類　一　覧

群別	語彙	1 依存性	2 情緒不安定	3 自己中心性	4 協調性	5 神経質	6 自閉性	7 劣等感	8 自己顕示性	9 衝動性	10 意欲性	X その他	Y 無答	表現水準 平均	表現水準 SD	使用度 平均	使用度 SD	明瞭度 平均	明瞭度 SD
第Ⅱ群	70 独立心のない	65	5	2	1	0	3	4	2	0	10	7	0	2.57	1.01	3.83	0.79	3.70	0.94
	13 気分にむらのある	0	80	1	2	6	2	0	0	5	3	0	0	2.63	1.14	3.88	0.79	3.70	0.93
	22 落着きのない	2	78	0	0	7	0	2	1	4	0	4	1	3.33	1.27	4.37	0.70	2.76	0.78
	41 移り気な	2	74	2	1	1	1	1	0	12	4	1	0	2.49	0.92	3.64	0.85	3.48	0.89
	72 むら気な	2	70	2	0	4	0	1	1	13	2	3	1	2.70	0.96	3.61	0.79	3.48	0.99
	66 注意散漫な	2	67	1	0	3	1	3	0	2	4	16	0	3.09	1.06	3.78	0.79	3.79	0.89
	39 自分勝手な	0	7	74	5	0	1	1	3	4	1	2	0	3.52	1.14	4.34	0.68	4.18	0.80
	17 柔軟性のある	3	1	0	77	2	1	1	3	2	2	5	2	2.48	1.01	3.68	0.88	3.26	1.06
	44 妥協的	11	0	1	73	2	3	0	1	2	2	3	1	2.85	0.97	3.98	0.77	3.72	0.94
	15 温和な	2	5	2	67	0	1	0	2	1	0	19	0	2.16	0.93	4.29	0.68	3.88	1.17
	84 社交的	0	0	4	61	1	0	2	13	2	11	6	0	3.67	1.05	4.16	0.71	3.96	0.84
	43 心配性の	1	9	0	1	79	1	5	1	0	0	2	0	2.14	0.78	3.90	0.78	3.78	0.85
	73 人に会いたがらない	3	1	0	0	3	80	10	1	0	0	2	0	3.17	1.22	3.48	0.88	3.53	1.06
	79 自分のカラにこもった	0	1	16	0	2	74	3	0	1	1	1	0	2.22	0.89	3.48	0.95	3.52	1.04
	48 黙りがちな	0	2	3	2	3	73	12	0	0	2	2	0	2.59	1.18	3.65	0.85	3.70	1.04
	56 派手好きな	0	2	4	0	1	0	1	77	9	3	3	0	3.78	1.01	4.07	0.75	3.72	0.89
	62 注意をひきたがる	1	2	7	1	3	0	2	76	2	3	1	1	3.42	1.09	3.40	0.92	3.63	0.89
	75 自意識過剰な	1	0	17	0	4	1	1	64	2	5	3	1	2.88	1.20	3.48	0.84	3.43	0.97
	25 虚勢をはりがちな	1	4	15	0	1	0	13	63	2	0	0	1	3.35	0.98	3.32	0.96	3.04	1.00
	76 爆発的	0	7	2	0	0	3	0	4	68	7	6	1	3.89	1.05	3.55	1.00	3.41	1.11
	90 根気のある	0	0	2	5	1	1	2	0	0	73	13	2	3.41	1.13	4.08	0.75	3.98	0.84
	78 粘りづよい	0	2	0	5	1	0	1	1	0	71	18	0	3.41	1.13	4.07	0.72	3.95	0.78
Ⅱ′	57 我をとおしがちな	1	3	62	2	0	2	0	23	1	3	1	1	3.30	1.18	3.57	0.92	3.63	0.97
	69 カーッとなりやすい	0	23	1	0	3	0	2	1	64	2	2	1	3.88	1.12	4.07	0.73	3.94	0.92

Table 4　　語　彙　分　類　一　覧

群別	語彙	1 依存性	2 精神不安定	3 自己中心性	4 協調性	5 神経質	6 自閉性	7 劣等感	8 自己顕示性	9 衝動性	10 意欲性	X 二重チェック その他	Y 無答 わからない	表現水準 平均	表現水準 SD	使用度 平均	使用度 SD	明瞭度 平均	明瞭度 SD
第Ⅲ群	19 べたべたした	**46**	12	0	2	12	5	3	2	0	0	18	0	2.80	1.15	3.11	1.02	2.84	1.15
	3 たよりない	**43**	13	2	5	0	14	61	0	0	5	5	2	2.47	1.09	4.23	0.61	3.68	1.06
	96 あきやすい	10	**48**	1	0	1	2	0	0	12	15	12	0	3.00	1.03	4.08	0.63	3.88	0.84
	64 いうことをきかない	1	5	**47**	12	0	9	1	5	4	2	14	0	3.44	1.09	4.08	0.70	3.96	0.92
	82 強情な	0	7	**46**	2	0	3	0	13	4	9	16	0	3.24	1.13	3.97	0.84	3.89	0.84
	92 自己弁護的	6	5	**44**	0	2	4	7	15	0	2	12	0	2.93	0.95	3.35	0.58	3.40	0.94
	50 従順な	20	2	2	**51**	1	3	0	0	1	2	16	1	2.41	0.93	3.89	0.86	3.70	0.97
	97 同情的	3	0	5	**51**	1	0	0	1	1	1	36	0	2.72	1.00	3.95	0.68	3.87	0.87
	59 人なつこい	15	2	0	**50**	1	0	0	4	3	2	19	3	3.05	0.95	3.88	0.78	3.66	1.02
	30 用心深い	1	1	11	2	**55**	16	2	0	0	0	11	1	2.37	1.05	4.20	0.80	4.01	0.85
	100 几帳面な	0	1	3	3	**44**	3	0	1	0	15	30	0	3.24	1.14	4.16	0.69	4.07	0.87
	60 打ちとけない	1	3	12	15	7	**52**	3	1	1	0	4	0	2.41	0.88	3.59	0.86	3.43	0.88
	67 内気な	5	1	9	0	18	**52**	10	3	0	0	2	0	2.18	0.86	4.12	0.70	3.77	0.94
	54 ひっこみ思案な	10	3	0	0	9	**49**	19	1	0	6	3	0	2.30	0.98	3.90	0.69	3.66	0.93
	42 孤立的	0	1	19	12	3	**47**	11	3	0	1	3	0	2.49	1.03	3.58	0.84	3.65	0.88
	83 逃避的	9	4	2	2	5	**46**	15	0	0	3	14	0	2.75	1.08	3.47	0.86	3.56	0.97
	91 ひがみやすい	0	12	4	1	10	9	**51**	3	2	3	5	0	2.38	0.95	3.80	0.79	3.65	0.96
	26 興奮した	0	19	2	0	10	1	0	1	**60**	4	3	0	3.24	1.34	4.26	0.72	4.05	0.87
Ⅲ′	51 頑固な	0	1	**49**	3	0	4	1	28	4	4	4	1	3.45	1.18	4.11	0.75	3.99	0.93
	23 世話好きな	0	0	3	**48**	0	1	0	21	2	14	11	0	3.95	1.01	4.31	0.66	4.14	0.88
	9 負けずぎらいな	0	0	10	1	0	0	5	**49**	1	34	0	0	3.37	1,37	4.27	0.81	4.11	0.97
	80 自己主張的	0	2	39	0	1	0	1	**45**	1	9	2	0	2.75	1.15	3.69	0.77	3.72	0.95
	18 自信のある	0	0	4	2	0	0	1	**43**	3	40	4	2	3.03	1.27	4.34	0.71	4.14	1.10
	1 乱暴な	0	22	7	0	1	0	1	14	**48**	0	1	5	4.30	0.99	4.47	0.84	4.48	0.70
Ⅲ″	63 おこりっぽい	0	31	9	2	12	0	2	0	38	1	4	1	3.75	1.10	4.58	0.66	4.08	0.83
	99 胸がドキドキしがちな	1	27	1	1	38	3	9	1	9	0	9	1	2.60	1.08	3.69	0.97	3.72	0.83
	29 なじめない	2	2	13	27	5	38	2	1	1	1	6	1	2.27	0.83	3.58	0.87	3.40	1.02
	81 体裁を気にしがちな	2	4	4	1	30	2	6	31	2	1	15	1	3.12	1.08	3.55	0.86	3.56	1.03
	65 はにかみがちな	6	3	0	0	14	31	31	0	1	1	11	2	2.70	1.09	3.55	0.85	3.48	0.95
	95 自己嫌悪的	1	6	0	0	12	26	38	4	2	0	9	2	2.30	0.89	3.22	0.95	3.33	1.00

Table 5　　語　彙　分　類　一　覧

群別	語彙	1 依存性	2 精神不安定	3 自己中心性	4 協調性	5 神経質	6 自閉性	7 劣等感	8 自己顕示性	9 衝動性	10 意欲性	X その他	Y 無答	表現水準 平均	表現水準 SD	使用度 平均	使用度 SD	明瞭度 平均	明瞭度 SD
第Ⅳ群	36 附和雷同的	34	22	2	7	0	0	1	1	16	2	9	5	3.17	1.19	3.64	0.98	3.64	0.96
	52 小児的	27	13	9	0	1	10	7	3	4	0	26	1	2.88	0.91	2.70	0.95	2.99	0.96
	34 幼稚な	19	13	6	0	1	4	16	3	2	0	35	0	2.66	1.00	3.96	0.73	3.56	0.92
	49 他人に関心が強い	17	0	7	12	12	0	3	14	3	11	21	0	2.82	1.00	3.41	0.85	3.41	0.91
	4 長つづきしない	9	38	1	0	1	4	1	1	16	21	6	1	3.18	1.14	4.16	0.55	3.98	0.88
	5 あきっぽい	15	37	2	1	1	5	2	0	13	16	5	2	3.04	1.17	4.10	0.73	4.01	0.90
	55 落着いた	1	11	1	10	3	2	0	5	2	7	54	3	2.89	1.05	4.31	0.71	3.88	0.98
	6 人に好かれない	0	0	26	30	1	21	3	10	0	0	9	1	2.47	1.04	4.01	0.93	3.70	1.04
	20 他罰的	10	2	19	1	2	2	2	4	10	0	31	17	2.91	0.83	1.89	0.85	2.26	1.01
	11 外罰的	4	4	14	0	1	3	7	11	0	13	27	16	2.86	1.04	1.74	0.91	2.93	1.00
	24 自制力のある	1	4	6	38	1	4	1	7	1	14	18	3	2.64	1.16	3.74	0.90	3.51	0.99
	74 安定した	1	14	3	17	0	1	0	2	1	12	48	1	2.53	1.01	3.97	0.81	3.77	0.99
	33 カンが強い	1	6	7	1	36	1	0	10	18	4	14	1	2.83	1.28	3.86	0.86	3.56	1.10
	7 内的葛藤の強い	0	12	6	1	27	20	3	5	3	9	9	5	1.78	1.01	2.11	0.92	2.49	1.12
	37 心気的	1	12	0	3	19	9	0	2	4	2	27	21	2.44	0.88	2.33	1.02	2.24	0.98
	16 抑制的	4	1	3	19	2	38	7	4	6	4	10	0	2.26	0.91	2.89	1.02	3.05	0.99
	21 落着きのない	0	3	4	1	10	30	26	4	4	1	1	6	2.59	1.09	2.57	1.04	2.74	1.04
	89 拒否的	1	5	14	14	3	28	1	4	3	3	22	1	3.17	1.02	3.20	0.95	3.40	0.98
	10 つめたい	0	6	17	9	13	26	3	1	1	1	23	0	2.24	1.17	4.03	0.90	3.42	1.08
	85 生気のない	3	7	0	0	10	18	18	0	2	17	22	2	2.79	0.94	3.38	0.85	3.30	1.00
	46 ひねくれた	0	19	5	3	6	16	36	1	2	0	11	0	2.36	0.99	4.01	0.66	3.61	0.96
	77 退行的	5	1	1	1	1	21	36	1	1	10	17	4	2.89	0.99	2.44	0.89	2.74	1.03
	12 自棄的	1	15	6	0	2	17	34	4	14	1	3	2	2.98	1.12	3.03	1.05	3.24	1.05
	68 おずおずした	2	18	0	1	23	14	31	3	1	0	6	0	2.77	1.12	3.40	0.99	3.19	1.05
	31 赤面がちな	1	12	1	0	20	21	32	2	2	0	10	0	2.52	1.17	3.30	1.04	3.60	1.19
	88 支配的	3	3	23	3	0	1	1	26	1	21	15	2	3.59	1.03	3.51	0.96	3.53	0.99
	47 軽卒な	0	22	0	0	0	6	3	1	38	1	27	1	3.45	0.90	3.90	0.73	3.87	0.88
	45 短気な	1	18	14	1	16	1	2	2	36	1	6	1	3.25	1.24	4.21	0.65	4.41	0.82
	87 短絡的	1	5	2	0	2	3	3	3	13	2	40	24	2.80	0.90	2.17	1.01	3.75	0.99
	53 やる気のない	21	7	2	1	1	5	13	1	0	39	9	0	2.97	1.05	4.01	0.74	3.89	0.87
	71 無気力な	18	2	0	0	0	16	13	1	1	34	12	3	2.57	1.04	3.74	0.78	3.68	0.94
	40 怠惰な	21	5	3	1	0	5	6	1	2	30	24	0	3.08	1.07	3.61	0.88	3.66	0.95
	28 耐久力のない	20	6	0	0	1	5	6	0	14	23	23	0	3.22	1.00	3.70	0.87	3.69	0.99
	98 無関心	6	9	13	6	0	11	1	1	1	14	37	1	2.59	0.94	3,95	0.69	3.75	0.40

Table 6　　N.G. と C.P. の群別語彙数

群別 / 対象群	第Ⅰ群	第Ⅱ群	第Ⅱ′群	小計	第Ⅲ群	第Ⅲ′群	第Ⅲ″群	小計	第Ⅳ群	計
N.G.	12	22	2	24	18	6	6	30	34	100
C.P.	38	19	2	21	12	17	4	33	8	100

これによると，N.G.にあっては，意味の限定の強い，共通性の高い語彙群である第Ⅰ群に属する語彙数は，100語中12語であり，C.P.と比較してきわめて少ないのがめだっている。一方，意味の限定の弱い，共通性の低い語彙群である第Ⅳ群に属する語彙数は，N.G.の場合34語で，C.P.と比較して多い。

このことは，性格表現用語に関して一般成人相互の間には，意味限定，意味理解の共通性が低いことを示しているのであるが，ここでとりあげた性格表現用語が実際の臨床事例から選出したという特殊性にその原因があるとしても，これらの語彙を使用してのクリニカル・サイコロジストと一般成人とのコミュニケーションの可能性の問題を検討する際には，注意を要することであろう。

また，個々の語彙について検討してみると，「短絡的」「落着いた」「安定した」「他罰的」「心気的」「外罰的」「無関心」「同情的」「幼稚な」「几帳面な」「軽率な」「小児的」等の語彙は，分類カテゴリーのうちの「その他」に25%以上のN.G.が分類しているが，それは，用意されたカテゴリー以外に分類カテゴリーとして適当なものがあるというよりも，「わからない」「無答」の反応が多かったことから，これらの語彙は，一般成人にとって意味理解が困難な，あるいは性格表現用語としては不明瞭な語彙であると考えられる。

2　語彙の表現水準

性格表現用語として各語彙が，人の性格について，より具体的な行動的・記述的レベルを表現するものか，それとも，より抽象的な内面的・解釈的レベルを表現するものかを5段階尺度評定で求めたのであるが，結果はTable 2～5の評定値欄に示した通りであった。また，この平均値について各群別にまとめたのがTable 7である。検定の結果，Ⅰ群とⅣ群との間，およびⅡ群（Ⅱ′を含む）とⅣ群との間には，その評定値に関して一応有意差がみられた。

Table 7　語彙表現レベルの評定値*

評定値** ＼ 語彙群	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	計
1.00～2.99	5	11	17	25	58
3.00～5.00	7	13	13	9	42
計	12	24	30	34	100

* X^2検定で有意差のみられたのは，Ⅰ：Ⅳ，Ⅱ：Ⅳ（P＜.05）であった。

** 1：非常に行動的・記述的
2：かなり行動的・記述的
3：どちらともいえない
4：かなり内面的・解釈的
5：非常に内面的・解釈的

Table 7によると，N.G.の場合には，第Ⅰ群からⅣ群になるにつれて内面的・解釈的と評定された語彙よりも，行動的・記述的と評定された語彙の方が多くなっている。つまり，行動的・記述的な語彙の方が意味限定が弱く，共通性が低いという結果になっているのである。これに対してC.P.の場合には，Ⅰ・Ⅱ群の語彙の方がⅢ・Ⅳ群よりも行動的・記述的と評定され，このことから，行動的・記述的な語彙を用いることによって性格の理解がより確かなものになることが示唆されたのであった。両者のこのような逆傾向についての明確なる解釈は困難であるが，一つには，用いられた分類カテゴリー自体が特性的レベルの語彙であって，いわば内面的・解釈的な語彙であるということに関連があると思われる。それゆえ，N.G.にとっては，分類対象の語彙と分類カテゴリーとの表現水準のギャップが大きく，そのために両者の対応づけが困難となり，そのために分類の一致率が低くなったのであろうと考えられるのである。

3　カテゴリー相互間の関連

上で検討をすすめてきた性格表現用語に関する一般成人とクリニカル・サイコロジストとの差違は，一つには分類カテゴリーとして用いられた語彙自体に関する理解の差違の反映であるのかもしれない。このことは，カテゴリー自体の意味の共通性を検討する必要を示唆する。

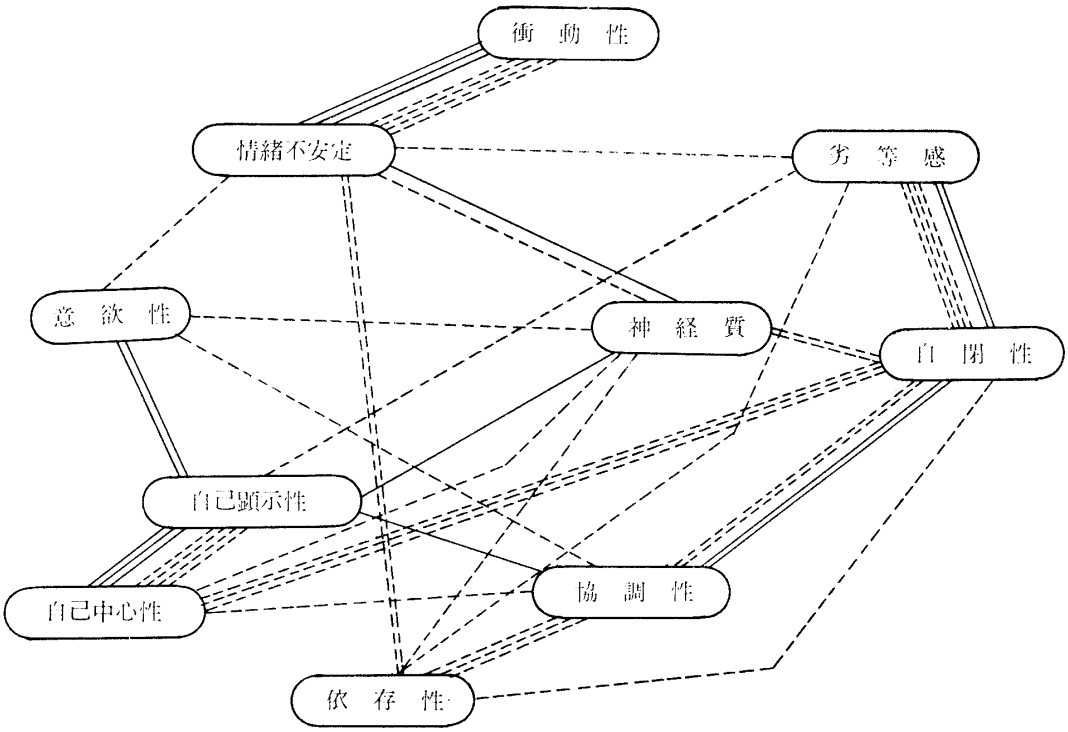
しかし，本研究の段階では，このカテゴリーとしての特性的語彙理解を直接扱った資料はない。従って，前回の研究と同様，2つのカテゴリーにまたがって分類された語彙数を手がかりにして，カテゴリー相互の意味の関連性を吟味するという観点から検討を加えた。つまり，2つのカテゴリーにまたがる語彙の数が多くなればなるほど，それらのカテゴリー相互の意味の近似性は大きくなるのであろうと考えた。

この近似性の指標及び整理の手続は前回と同様であるが，一般成人についての結果を図示したのがFigure 1である。

この図に示されるように，N.G.の場合にもC.P.の場合と同じく，「情緒不安定」と「自己顕示性」との2つのカテゴリーは，ともにほかのカテゴリーとの結合線が多く，当カテゴリー相互では直接に結びついていないことから判断して，この2つは，ほかのカテゴリーよりもより包括的で上位の概念をもった語彙であると考えられる。N.G.の場合には，そのほかに「自閉性」も，より包括的な語彙となっている点がC.P.の場合と異なっている。

さらに詳細に検討すれば，「情緒不安定」と「衝動性」，

Figure 1　　カテゴリー間の相互関連



註）———：Ⅱ′，Ⅲ′，Ⅲ″の段階において，またがりのみられたカテゴリーを示す。
結合線の数はまたがった語彙の頻数をあらわす。
……：Ⅰ，Ⅱ，Ⅲの段階において，主として分類されたカテゴリー以外で，11%以上の分類がみられた場合の主カテゴリーとのまたがりを示す。
結合線の数はまたがった語彙の頻数をあらわす。

「自己顕示性」と「自己中心性」とは，N.G.の場合でも相互に強い関連性を示しており，意味の近似性を暗示している。また，「自閉性」と「劣等感」，「自閉性」と「協調性」とはともに，C.P.よりもN.G.の場合の方がより強い関連性をを示している。これに対して，「劣等感」と「神経質」，「情緒不安定」と「意欲性」，「自己中心性」と「依存性」とは，C.P.の場合には比較的強い結びつきがみられるが，N.G.の場合にはほとんど結びつきがみられない。これらの諸点が，多少両者間にみられるカテゴリー相互の関連性の差違を，示唆しているように思われる。

4　語彙の使用度・明瞭度

今まで主として，一般成人とクリニカル・サイコロジストとの意味理解の差違に焦点づけて検討をすすめてきた。明らかなように，C.P.に比べて一般成人の間には，意味理解に低い共通性しかみいだされなかったのは，C.P.が専門家として心理学的臨床の分野で性格像の把握・記述を主たる業務としていることを考え合わせると，当然の結果であるといえるかもしれない。

しかし，前述したように効果的な治療・指導を期待するためには，一般成人のなんらかの協力を必要とするのであり，そのためには，両者のコミュニケーションの可能性を吟味しておかねばならない。その意味で，両者間にみられる意味理解の差違を単に指摘するだけでは不十分であり，共通性を一層高めるためには，その差違の根拠を検討し，意味理解を規定する条件にも接近しなければならないであろう。

ここで，この条件を明らかにするために，本研究の段階で得られた資料に基づいて考察しておきたい。

本研究においては，100語の語彙それぞれについて，「表現水準」の評定のほかに「使用度」「明瞭度」の評定をも求めた。つまり，各語彙について，「ふだんよく使われていることばか，それとも，あまり使われていないことばか」（使用度），「ことばとして，その意味が明瞭であるか」（明瞭度）について，5段階尺度の評定を求めたのである。その使用度，明瞭度についての結果は，先の Table 2～5 の評定値欄に示した通りであった。また，これらの平均値について各語彙群別にまとめたのが，Table 8 と 9 で各評定値の平均値の差の検定結果が Table 10, 11 に示される。結果は，必ずしも

Table 8　語彙使用度の評定値

評定段階* ＼ 語彙群	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
語数	12	24	30	34
低　1.00～2.99				9
中　3.00～3.99	5	16	17	17
高　4.00～5.00	7	8	13	8
評定値平均	4.04	3.82	3.90	3.38

*　1：めったに使われない
　　2：あまり使われない
　　3：どちらともいえない
　　4：かなりよく使われる
　　5：非常によく使われる

Table 9　語彙明瞭度の評定値

評定段階* ＼ 語彙群	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
語数	12	24	30	34
低　1.00～2.99		1	1	7
中　3.00～3.99	10	22	21	25
高　4.00～5.00	2	1	8	2
評定値平均	3.85	3.63	3.76	3.43

*　1：非常に意味が不明瞭である
　　2：かなり意味が不明瞭である
　　3：どちらともいえない
　　4：かなり意味が明瞭である
　　5：非常に意味が明瞭である

Table 10　使用度の平均値の差の検定結果

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ		>		≫
Ⅱ				≫
Ⅲ				≫
Ⅳ				

Table 11　明瞭度の平均値の差の検定結果

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ				≫
Ⅱ				>
Ⅲ				≫
Ⅳ				

一貫した傾向はみられないが，使用度，明瞭度とも，第Ⅳ群の平均値は他の語彙群に比べて有意に低く，語彙の意味限定性が弱いほど，使用度，明瞭度とも低いことが考えられる。このことは，当然のことながら，一般成人によってよく使われているとはいえない，意味が明瞭だとは評定されていない語彙ほど，彼らの間では意味の限定が弱く，共通性が低い語彙であることを示すと考えられ，2つの指標が意味理解の規定条件となんらかの関係があることが示唆されるのである。

最後に，同じような観点からクリニカル・サイコロジストと一般成人の語彙分類を比較し，それが使用度・明瞭度とどのような関係があるかを検討したい。つまり，C.P.がある特定の語彙群に分類した各語彙が，N.G.ではどの語彙群に分類されているか，またその使用度・明瞭度の大きさはどうかを分析したのである。結果は，Table 12 に示される。

これによると，C.P.によってそれぞれの語彙群に分類された語彙は，N.G.の場合，Ⅲ群の1語を除いてすべてが，同じ意味限定の段階かそれ以下の段階の語彙群に分類されている。これは，C.P.とN.G.との間にみられる語彙分類の差違が，ある特定の語彙に関する分類の差違によるというよりも，とりあげた性格表現用語全

Table 12　C.P.とN.G.の語彙分類比較及び使用度・明瞭度評定値

C.P. 語彙群	C.P. 語数	N.G. 語彙群	N.G. 語数	使用度 平均値	明瞭度 平均値
Ⅰ	38	Ⅰ	12	4.04	3.85
		Ⅱ	19	3.82	3.63
		Ⅲ	4	3.69	3.55
		Ⅳ	3	2.90	3.38
Ⅱ	21	Ⅰ			
		Ⅱ	4	3.93	3.70
		Ⅲ	13	4.03	3.88
		Ⅳ	4	3.72	3.73
Ⅲ	33	Ⅰ			
		Ⅱ	1	3.48	3.43
		Ⅲ	13	3.83	3.71
		Ⅳ	19	3.38	3.39
Ⅳ	8	Ⅰ			
		Ⅱ			
		Ⅲ			
		Ⅳ	8	3.40	3.35

般にわたって，N.G.では意味限定が弱く，共通性が低いことを示すものであると考えられる。

さらに，C.P.の分類でⅠ群に属している意味限定の強い38語が，N.G.ではいずれの群に分類されているかをみてみると，それらはⅠ群からⅣ群すべてにわたって分類されていることがわかるが，意味限定が弱くなるにつれて使用度・明瞭度ともに一貫して小さくなっている。このことは，C.P.にとって意味限定が強く共通性が高い語彙であっても，N.G.にとっては使用度が低く明瞭度も低い語彙は，共通性が低い語彙であることを示している。ここにも，使用度・明瞭度が意味理解の規定条件と関係があることが示唆されるのである。

Ⅳ 要　約

われわれは先に，心理学的臨床の分野で実際に用いられている性格表現用語をとりあげて，日常の臨床実践の過程で性格像の把握・記述を業務としているクリニカル・サイコロジスト相互の間に，それらの用語に関する意味理解の共通性がどのようにみられるかを中心に検討した。この共通性の問題は，彼ら相互のコミュニケーションの基礎となる専門用語の検討にかかわるだけでなく，臨床活動の性質上なんらかの接触をもつ一般成人とのコミュニケーションの可能性の検討にも必要であろう。このような問題意識のもとに，一般成人として社会主事講習会出席者を対象にして，前回とほぼ同じ手続で，性格表現用語に関する意味理解の実際を明らかにし，その結果をクリニカル・サイコロジストの場合と比較し，理解の差違を検討することによって，両者間のコミュニケーションの可能性を吟味しようとした。その見い出された結果を要約すると，次の通りである。

(1) 性格表現用語としての100の語彙を10のカテゴリーに分類するという作業を通して，用語に関する一般成人の意味理解を検討したところ，意味の限定がはっきりした，共通性の高い語彙は100語中わずか12語で，クリニカル・サイコロジストと比較してきわめて少なかった。また，いくつかの語彙は，彼等にとっては意味理解が困難であった。

(2) 意味理解と語彙の性質とは関連があると考えられるが，この語彙自体の性質を，ここでは表現水準の評定という観点から検討を加えた。その結果は，一般成人にあってはクリニカル・サイコロジストのそれとは逆傾向であって，共通性の低い語彙の方がむしろ，「行動的・記述的」と評定されており，この点にも，両者間に語彙理解の差違がみいだせた。

(3) また，分類カテゴリーとして用いられた特性的レベルの語彙自体に関する，一般成人の意味理解を明らかにするために，2つのカテゴリーにまたがって分類された語彙を手がかりにしてカテゴリー相互の関連性を検討した。その結果は，彼等の場合にも，「情緒不安定」と「自己顕示性」の2カテゴリーが，相互に関連をもたずしかもほかの多くのカテゴリーと結びついていることから，より包括的な概念であると考えられた。また，一般成人の場合には，そのほかに，「自閉性」もこの種の概念であることがわかった。

全体としてみれば，一般成人とクリニカル・サイコロジストでは，カテゴリー間の関連性は類似していたけれども，詳細に分析した結果，いくつかの差違が指摘できた。

(4) 性格表現用語に関する一般成人の意味理解を規定する条件を探索するために，ここでは，語彙の「使用度」「明瞭度」と意味理解の共通性との関係を吟味した。その結果は一貫してはいなかったが，第Ⅳ群に属する意味の限定が弱い語彙は，「使用度」「明瞭度」ともに有意に低く，それらが意味理解の規定条件となんらかの関係があることが示唆された。このことは，クリニカル・サイコロジストが第Ⅰ群に分類した語彙が，一般成人ではどの語に属し，それらの使用度・明瞭度はどうかを検討した結果によっても確められた。

附記　本研究をすすめるにあたって御協力いただいた社会主事講習会の担当者及び受講者の皆様に，厚くお礼申し上げます。

附表 1

性格表現用語に関する調査

名古屋大学教育心理学教室

氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（男・女）　年令・満＿＿＿＿才　職業＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　最終学歴＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

（備考　　）

記入要項

(I) 分類

下の左欄には，人間の性質，行動，態度などをいい表わしている100個のことばが書いてあります。その一つ一つについて，次の1～10までの10個の性格特性用語（分類カテゴリー）のうち，どれともっとも関係が深いかを考えて判定して下さい。そして，例にならって，関係が深いと思われる分類カテゴリーの位置に○印を記入して下さい。もし，同一のことばが2つ以上のカテゴリーにまたがっていずれとも決めがたい場合には，あてはまるカテゴリーすべてに○印をつけ，そのうちで，しいて考えればもっとも関係が深そうだと思われるものには，◎印をつけて下さい。なお，どのカテゴリーとも関係がないと思われる場合には，「X　その他」に○印をつけて下さい。

〔分類カテゴリー〕

1. 依存性	2. 情緒不安定	3. 自己中心性	4. 協調性	5. 神経質	6. 自閉性
7. 劣等感	8. 自己顕示性	9. 衝動性	10. 意欲性	X その他	

(II) 評定

次に，それぞれのことばが，(1)人間の性質，行動，態度に関して，内面的・解釈的な水準を表現しているものか，それとも，具体的な行動的・記述的な水準を表現しているものか（表現水準），(2)ふだんよく使われていることばか，それとも，あまり使われていないことばか（使用度），(3)ことばとして，その意味が明瞭であるかどうか（明瞭度）について，それぞれ判定して，5段階尺度のどの位置にあてはまるかを評定して下さい。評定は，例にならって，あてはまる位置の数字に○印をつけて下さい。

	性格特性用語（分類カテゴリー）											表現水準					使用度					明瞭度				
	1 依存性	2 情緒不安定	3 自己中心性	4 協調性	5 神経質	6 自閉性	7 劣等感	8 自己顕示性	9 衝動性	10 意欲性	X その他	非常に内面的解釈的	かなり内面的解釈的	どちらともいえない	かなり行動的記述的	非常に行動的記述的	非常によく使われる	かなりよく使われる	どちらともいえない	あまり使われない	使われないめったに	非常に明瞭である意味が	かなり明瞭である意味が	どちらともいえない	かなり不明瞭である意味が	非常に不明瞭である意味が
	5	4	3	2	1							5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
例. つめをかむ	○				◎							5	4	3	2	①	5	④	3	2	1	⑤	4	3	2	1
1. 乱暴な												5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
2. わがままな												5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
3. たよりない												5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
4. 長つづきしない												5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
5. あきっぽい												5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
6. 人に好かれない												5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1